



「真実に生きよう」(要旨)
聖書箇所：マタイ 6:1-6, 16-18

【1】三つの「善行」

敬虔なユダヤ人は、貧しい者に施しをすること、決まった時間に祈ること、定期的に断食することを習慣にしていました。それらは彼らにとって特別な行為ではなく、なすべき宗教的行為の三本柱でした。先祖代々、「善行」(義を行う)をすることの幸いが教えられてきました(創 18:19, 詩 106:3)。それがアブラハムの子孫である彼らの理想的な生き方でした。では実態はどうだったのでしょうか。財力のある者は、周囲の人をアツと驚かせる施しを見せつけることで社会的地位を高めました。祈りの時間になれば、人々が集まる場所に出向いて朗々と祈る者もいました。顔をやつれさせ、「大丈夫ですか!？」と駆け寄る人に断食していることを伝える者もいました。「善行」が「人に見せるために」行われていたのです。

主イエスは、「施し」(2-4)、「祈り」(5-6)、そして「断食」(16-18)が、人からの称賛を求めるものではなく、隠れたところで見られる神の報いを求めるべきだと教えました(1)。

【2】人に見せたいと思うのはなぜか?

「善行」を「人に見せたい」と思う動機は何でしょうか。せつかく、財を費やし、時間を割き、苦痛を耐え忍ぶのであれば、然るべき報いを受けるべきだと考えるからでしょう。誰にも知られなかつたらそれが無駄になるのではないかと。それに対して、主イエスは、施しは「右の手がしていることを左の手に知られないように」、祈りは「家の奥の自分の部屋に入り…戸を閉めて」、断食は普段の生活と変わらずに「頭に油を塗り、顔を洗い」なさいと教えました。

人に見られない=誰にも評価されない、そ

う考えているなら、「隠れたところで見られるあなたの父(神)」を蔑ろにしていることになるのです。「報いを直ちに人間のところに求める欲求には、神への信仰と神への愛が欠けている」(シュラッター)

「神への信仰と愛」による行為は、時に人の目には無駄に見えます。たとえば、イエスの弟子たちは、イエスの頭に高価なナルドの香油を注いだ女性の行為を、役に立たない、それだけの甲斐がない、すなわち無駄だと断定しました(マルコ 14:3-5)。

【3】真実に生きよう

人目に隠れた「善行」は、無駄なのでしょうか。いいえ、隠れたところで見られる父が報いてくださいます。私たちが「神への信仰と愛」に促されて行うことであれば、人目に隠れても無駄だとは思わないのでしょうか。一方、限界のある人間の目を気にし、その評価を第一にして一喜一憂するのであれば、真の充足を得ることはできません。

▶映画『炎のランナー』(1981年): パリオリンピック陸上短距離で英国に金メダルをもたらしたハロルドとエリック。

罪人を愛し、赦し、そして救ってくださった神を知り、信じる時、神への「善行」は義務ではなくなります。ナルドの香油を注いだ女性のように、「神への信仰と神への愛」に突き動かされるからです。信仰の先輩たちは「神への信仰と神への愛」を次のように告白しました。「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。—わたしがわたし自身のものではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです。」(吉田隆訳『ハイデルベルク信仰問答』)